

ダイバーシティ事業 国際共同若手研究者養成プログラム
報告書

報告日：2019年3月31日

派遣者所属名	国際文化学研究科・国際文化学研究推進センター
派遣者氏名	南郷晃子（中島晃子）
研究タイトル	内側から「驚異」はいかに表象されるのか——キリスト教宣教師をめぐる日本とチアパスの「異人」伝承
研究目的	<p>大航海時代からはじまる他文化との出会いは、しばしば「Wonder（驚異）」という言葉で表現され、新しく「発見」された人間はモンスターと同じ区分のうちに記録されていった。こういった「発見」する西洋からの視線に対し、「発見」される側は来訪者に対する驚き（Wonder）をどのように表象していったのか。日本とメキシコチアパス高原のフォークロアを比較しながら考察する。「発見」した新しい人々を編纂していった西洋の驚きに対応する驚きを、日本においては地域社会に流布する写本のうちに見出すことができる。では同じく16世紀の西洋からの来訪者に驚嘆しながら、異なる伝承の土壌を持ち、さらにその後の征服の過程も日本とは大きく異なるメキシコ、特に先住民文化が色濃く残るチアパスではどのように表されたのか。日本とチアパスのフォークロアにおける西洋の表象を比較検討することで、出会いの「驚き」を複眼的に捉え直すことを目指す。</p>
研究報告	<p>日本のフォークロア、特に地域社会に流布した写本、例えば会津地方を中心に流布した『老嫗茶話』や米沢地方に残る『雨夜の伽』などには、クリシタン・バテレンに関する伝承が散見される。あるいは、獵師など日本における「他者」が「クリシタン」としてみなされる伝承が残る。</p> <p>本研究は、これらクリシタン・バテレンをめぐるフォークロアの語りを、日本固有の事象として完結させずに、16世紀における全世界的な西洋との「出会い」の文脈から捉え直すことを目指し、メキシコチアパス州の先住民社会との比較のうちに、伝承を再考する。チアパス先住民社会のフォークロアについては、マドリード・コンプルセンテ大学教授であり、チアパス自治大学先住民研究センターの招待研究員であるペドロ・ピターチ教授の協力を得、彼の研究を踏まえながら考察を深める。</p> <p>メキシコ、チアパスは、1528年にスペインにより征服された後1545年にドミニコ会修道士フレイ・バルトロメ・ラス・カサスが赴任し、キリスト教化がすすむ。現在村人のほとんどは「カトリック教徒」である。ただしその「カトリック」には、先住民文化の特徴が濃厚にみられる。先住民村落の教会に基本的には司祭は滞在せず、洗礼など行事ごとに村へ通うという形が一般化している。すなわちヨーロッパ人である宣教師、それに続く司祭は一定の権威であると同時に、他者であり続けた。また、ラディーノと言われる、白人を含む村の</p>

外部のスペイン語話者たちもまた、先住民村落にとっての「他者」である。

このような中、「スペイン人」は先住民村落におけるフォークロアの各所に表象される。例えば、シナカンタン村のサンセバスチアンの祭りでは、スペイン人の姿が登場する。あるいは魂の表象にも“Castilla”すなわちスペイン人が濃密に関わる。ペドロ・ピターチによるとチアパス高原カンクック地域のツォチル語使用先住民のlab-「魂」-はジャガーや虹など複数の存在からなる。ここにキリスト教の司祭や、学校の教師、書記、さらには上記のようなライトなど西洋の文化と不可分な存在が含まれる。これらをペドロ・ピターチは「魂の内側に歴史が織り込まれる」と指摘する。すなわちlabの果たす役割や資質のうちには、歴史、記憶が含み込まれているとみなす。しかしlabはあくまでも自己の内側にある。カンクックのフォークロアにおいては自己のもっとも内部にあるものが「他」なるものなのであり、それゆえlabは西洋イメージを多分に取り込む。

他方、日本においては、西洋との出会いは宣教師との出会いに他ならず、チアパスへのラス・カサス赴任の四年後、1549年のイエズス会修道士フランシスコ・ザビエルの布教の開始がその初発である。その後のいわゆる「鎖国」政策により、ヨーロッパ人イメージは、ほとんどが、かつて国内にいたほぼ唯一のヨーロッパ人、宣教師イメージに収斂され、同時にエキゾチックな「キリシタン」イメージへと敷衍される。歴史的要素を鑑み伝承を再検討すると、処刑、特にコミュニティ内部の信者を巻き込んだと認識された処刑の景観があることが明らかである。最初期の宣教師との出会い、そして続く処刑の景観は記憶のうちに固定されている。これらが、ペドロ・ピターチの言葉を借りるのであれば「フラグメント」として散在する。

チアパスでは、人々は宣教師、司祭をはじめ“White man”やラディーノと出会い続ける。その結果例えば、書記の「書く」行為が、そのlabにおいて病を呼ぶ行為とされるなど、眼前の行為が、フォークロアに混在することになる。しかし日本では「事実として」ヨーロッパ人との出会いは重ねられない。そこで立ち現れるものは、「キリシタン」をモチーフに使用した歌舞伎や派生する版本、あるいは宣教師をめぐる実録写本である。具体的には天徳物と言われる一連の演芸、また『切支丹宗門来朝実記』等の名前で広まった写本群などがある。これらに含まれる宣教師およびキリシタン像—宣教師の記憶を含みつつ、娯楽として演出され、また物語として他の様々なモチーフを取り込み増殖していく—がそれぞれ融合し、また時には個別に、地域写本や、伝承のうちに再現されたと言える。現前に立ち現れるものは、演芸であり、「本」なのである。これらもまた「白人」への衝撃、処刑の景観とともにフラグメントとしてフォークロアを再構成していく。またこれらの叙述を分析すると「他者」表象ではなく、共同体内部の「他者」的存在への言説となることが明らかになる。「他」なるものを語るときに「西洋」が立ち上がるのである。

西洋、特に日本においては宣教師をめぐるフォークロアを、西洋との「出会

	い」に始まる各地における共時的な現象として捉え直すことで、これらのフォークロアの意味が再考される。またこの試みを通じ古くは「発見」として表されてきた「他者」との出会いをヨーロッパの視点から解放することになる。
今後の研究の見通し	<p>今後は、テーマについてはより限定し詳細な比較研究を行うことを目指すと同時に、比較研究を行う地域はより広げて行く。</p> <p>具体的には、ペドロ・ピターチ教授の協力を得ながら病、そして治癒といった身体に関わる問題を中心に「西洋」をめぐるフォークロアの比較検証をすすめる。未知の病原菌による病の流行、あるいは治癒をめぐる「他者」の霊的な力、さらに西洋からの技術としての医療行為といった病と治癒をめぐる「西洋」イメージとそのフォークロアへの影響をチアパス州の事例との比較を含めつつ考察する。さらに、ブラジルにおける宣教師像の研究をすすめる研究者の協力を得て、より広範囲の比較研究へと展開する予定である。</p>
研究成果の発表予定	<p>・国際共著による学術論文や国際会議での発表予定</p> <p>第13回国際比較神話学会（Comparative）において、発表する予定。タイトルは以下の通り。</p> <p>“<i>SAN-JIN</i>, Hunter, and Christianity—the overlapping image of the missionaries and imaginary people living in the mountain”</p>

海外派遣終了後の研究の進捗状況（2020年2月現在）

海外派遣終了後、研究成果の一部を国際比較神話学会で報告し、それを元にした投稿論文の作成を進めている。また今回の派遣で、新たな研究協力者を得ることができたが、直接会う機会がなかなか得られないため、なんらかの助成金を得られないかと試行錯誤をしている。